

Sport
Godzilla®

スポーツ ゴジラ®

第 65 号

特集
新年スポーツ再魅了



無料



スポーツ振興くじ助成事業

「ゴジラ」は東宝株式会社の登録商標です。
『スポーツゴジラ』は、日本スポーツ学会が
商標使用の許諾を受け、スポーツネット
ワークジャパンが発行しています。

2 第65号を発刊するにあたり

長田 渚左

■特集■

「新年スポーツ 再魅了」

4 脳が微笑んでいた——佐藤 晋太郎
——スポーツ観戦と幸福感のメカニズム

取材・構成
首藤 正徳
長田 渚左

13 エンジョイ・ベースボールと
スポーツマンシップ——森林 貴彦

構成
首藤 正徳

22 第1回日本スポーツ学会大賞
【受賞者】坂田信久氏と日本テレビ箱根駅伝中継スタッフ

構成
阿部 雄輔

38 『走』第12回
運動会では「走るクラシック音楽」の復活を!

玉木 正之

39 夢劇場『馬』No.37「眼光」

長田 渚左

40 バックナンバーのご案内

南 伸坊 表紙のつぶやき

「お正月は箱根駅伝だ。」

お屠蘇とお雑煮とテレビの箱根駅伝がセットで思い出される。」

スポーツネットワークジャパンHP <http://sportsnetworkjapan.com/>

バックナンバー第20、40～62号はホームページからお読みいただけます。

『スポーツゴジラ』は、種目を問わずスポーツそのものの魅力や
価値を語るスポーツ総合誌（フリーペーパー）です。

第65号を発刊するにあたり

編集長 長田 渚左



新年を迎えるにあたり、箱根駅伝のテレビ中継が欠かせないという人は少なくない。

各大学10人のランナーが東京・大手町から箱根の山を2日間で往復してタスキをつなぐ。毎年、数々のドラマが生まれ、正月の風物詩として定着している。自らの限界に挑むランナーたちの一途な姿に、新春に背筋が伸びるような気持ちになる。

かつて完全生中継は箱根の山という大きな壁が立ちはだかり、不可能と言われていた。それを日本テレビの坂田信久プロデューサー（当時）らが苦心、努力、情熱で、周囲を説得して実現させた。

日本スポーツ学会では2010年に「日本テレビ箱根駅伝中継スタッフ」を、第1回日本スポーツ学会大賞に選出した。今年101回目を迎えた大会に

合わせて受賞記念講演をアーカイブで再録した。

そして今回は誰もが経験したことのあるスポーツ観戦で生じる高揚感や幸福感を、脳という視点から研究し、その科学的メカニズムの実証に成功した、研究チームの早稲田大学スポーツ科学学術院の佐藤晋太郎准教授を取材した。

この研究結果はスポーツ観戦の効果を科学的に裏付けるとともに、スポーツが人々や社会をより充実、向上させる可能性を示唆している。それを年頭に感じていただければと思う。

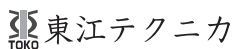
さらに2023年夏の高校野球で107年ぶりに全国優勝した慶應義塾高校の森林貴彦監督に「エンジョイベースボール」と「スポーツマンシップ」の神髄について語っていただいた。

今も世界各地で戦争・紛争が続いている。終わりの見えない戦況の中、スポーツが平和への道しるべになることを信じて、スポーツの可能性を再考する新年の一冊になれば……と願っています。

ご協賛およびご協力企業・団体



人と社会を支える力



(順不同)

新年スポーツ
再魅了

脳が微笑んでいた ——スポーツ観戦と幸福感のメカニズム

取材・構成 首藤正徳
長田渚左

スポーツを観戦すると気分が高揚したり、勇気や活力がわく……誰もが体験したことがあるだろう。実はこの時、人の脳内で幸福感を高める作用のある「報酬系」と総称される神経系のネットワークの活動が高まっていた——このほど早稲田大学などの研究チームが初めて科学的メカニズムの実証に成功した。この研究結果はスポーツ観戦が生活の質の向上や、メンタルヘルスへの改善策につながることも裏付けた。チームの早稲田大学スポーツ科学学術院の佐藤晋太郎准教授に研究内容と今後の展開について聞いた。

※研究チームメンバー

佐藤晋太郎、

木下敬太(シンガポール・ナシヤン工科大学アシスタントプロフェッサー)、

中川剣人(上武大学スポーツ健康マネジメント学科准教授)

佐藤 晋太郎(さとう・しんたろう) 1983(昭58)年、北海道生まれ。早稲田大学スポーツ科学学術院准教授。Sport & Entertainment Management Lab.主宰。北海道教育大学卒業、早稲田大学修士課程修了。数々の研究プロジェクトに従事し、2015年に米フロリダ大学でPh.D.を取得。その後、米ジョージアサザン大学助教授、米モンクレア州立大学ビジネススクール助教授、米ニューヨーク州立大学パルーク校ビジネススクール客員研究員を経て、現職に至る。消費者行動分析を主要な研究トピックとし、Journal of Sport ManagementやSport Management Reviewなど国際主要学術誌に多くの論文を発表している。スポーツやエンターテインメントの力を社会に還元するという「Management through Sport & Entertainment」をライフワークに掲げている。

アンケートとMRI

——スポーツを観戦すると気分が良くなったり、活力がわいてきたりする体験は誰にでもあります。それを私たちは体感としては知っているのですが、そのメカニズムを初めて「脳活動と脳構造」という科学的な研究で解明されました。なぜ「脳」だったのですか？

佐藤 スポーツマネジメントの研究はほとんどが社会科学的なアプローチのアンケート手法です。私もその手法で「ウェルビーイング」（心身が良好で満たされた状態）という研究を何年もやってきたのですが、「タイム（タイムパフォーマンス）の時代」と言われる最近では、アンケートを配つても、あまり深く考えずに「パツ、パツ」と回答する人が少なくないような気がして、データを疑っていたところがありました。もうちょつと強い裏付けがほしいと考えていくうちに、自然と「脳」への神経生理学的ア

プローチにシフトしていききました。

——これまでスポーツ観戦で体験する充実感や幸福感を、脳の作用という視点から科学的に検証した例はなかったのではないですか。

佐藤 他の研究者の方も脳に興味があると思うのですが、デバイス（装置）がなければ測定できません。脳の深部の測定にはMRI（磁気共鳴画像装置）が必要です。医学部や病院のある大学にはありますが、臨床で使っている場合もあるため、なかなかスポーツマネジメント研究に使わせてもらえる余裕はありません。医学と比べて社会科学系の研究はインパクトに欠ける面もあります。そういった要因でみなさん研究されていなかったのだと思います。私の在籍している早稲田大学には病院はないのですが、研究のためにMRIが常設されています。それが今回の研究の後押しをしてくれました。

——最初に2019年にスポーツ庁が実施した日本の男女計2万人を対象にしたスポーツへの関心や

実施状況を調査した大規模データを分析されたそうですね。

佐藤 はい。私たちは3つの研究で1本の論文にしています。1つ目の研究がスポーツ庁のデータの分析で、アリーナ・スタジアム観戦、テレビ・インターネット観戦した人は、しなかった人よりも生活充実感が高い傾向が示されました。2つ目の研究は男女計208人に、野球、サッカー、テニス、ゴルフのハイライトシーンを集めた映像を視聴してもらい、オンラインアンケートで楽しさや活力の変化など競技による効果の違いを分析しました。

——その4競技を選んだのはなぜですか？

佐藤 ある会社の「日本人が好きなスポーツランキング」のアンケートで、人気スポーツの上位2競技が野球とサッカー、下位がテニスとゴルフでしたので比べやすいと考えました。その結果、人気スポーツを観戦する方が、よりウェルビーイングの醸成効果が高いことが分かりました。

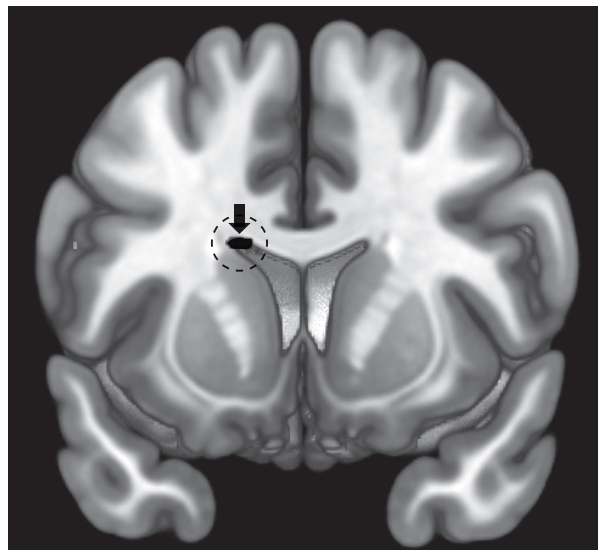
野球とゴルフ

——そこで、いよいよスポーツ観戦時の脳の中の活動状況を調べるために、3つ目の早稲田大学での脳の検査に進んだわけですね。20代の男女14人に野球とゴルフの映像を、MRIの中で視聴してもらったそうですね。なぜこの2競技に絞られたのですか？

佐藤 脳の活動は目が動くだけで影響が出てしまいます。例えばサッカーで検査をすると、脳活動が観戦の影響なのか、目を動かしたことによるものなのか判別できなくなる可能性があります。野球とゴルフはスイングの動作が似ているので、脳の活動を比べる時にノイズが小さい。しかも、先ほどのアンケートの人気スポーツと非人気スポーツと合致していたのでこの2競技を選びました。

——MRIでの検査で特に気を付けたことはありましたか？

佐藤 磁場がすごいので磁場に反応しない特殊な



イラスト後頭部イメージ
スポーツ映像を見たときに活性化した脳の尾状核(点線部の領域)

ゴーグルとモニターを使いました。さらにMRIの中はすごい音がするので、気にならない程度に音を消すヘッドホンもつけてもらいました。選手名やアナウンサーの実況、歓声もすべて消してスポーツシーンだけに絞って実験しました。

活発化と肥大

——スポーツを観戦した時に脳の活動にどのような変化がありましたか？

佐藤（快感や意欲に関係するとされるドーパミンやセロトニンの生産にも関わる）「びじょうかく尾状核」という領域に血流の量が増えて、活動が活発化していました。そして、ゴルフより野球を見ている時のほうが、血流量が多く、脳活動がより活発化することも分かりました。つまり、より知っているスポーツの方が、脳活動が活性化します。ただし、ゴルフでも血流は増していたので、ゴルフに効果がないというわけではなく、野球の方が一層の効果があるということだと考えています。

——スポーツを観戦すると快感を得られ、活力がわいてくる、という私たちの体感が、脳の活動で実証されたわけですね。そのほかに何か意外な発見はありましたか？

佐藤 意外ではなかったのですが、良かったのは脳構造の変化を発見したことです。スポーツを観戦する頻度が高い人ほど、尾状核と扁桃体の灰白質（神経細胞の集まっているところ）の体積が肥大していました。この領域は報酬系と総称される神経回路に関連しています。スポーツ観戦から得られる瞬間的な楽しいとか嬉しいという感覚を頻繁に経験している人ほど、より一層幸せを感じやすい脳を獲得している可能性が示されたわけです。

——つまりスポーツを観戦すると一時的に心が満たされるだけではなく、何度も観戦することで脳の構造に変化が起きて、より大きな幸福感を持続的に得られるということが分かったわけですか。

佐藤 そうです。脳活動の変化はスポーツを観戦したら活発になったという単発の栄養剤を注入したようなものです。脳構造の変化はその栄養剤を飲み続けたらどうなるかということで、分かりやすく言うと筋トレと同じです。筋トレを続けていくと筋肉が

肥大しますよね。同じように脳の報酬系回路をつかさどる脳の部位も肥大することが分かりました。肥大したことで、より満たされた気分になりやすくなるということだと考えています。

——すると大好きなホームランのシーンを毎日見ると、気分がいいという状態が継続するかもしれないね。

佐藤 絶対にいいと思いますね。それを示唆しているのがこの脳構造の変化ですね。

——ドジャースの大谷翔平選手のホームランシーンを見たら、さらに大きな効果が出るのではないですか？ 人気選手の映像を見せた実験はしなかったのですか？

佐藤 知っている選手だともっと幸せを感じる可能性は確かにありますが、私たちの実験では、できるだけ知らない人を使うことにこだわりました。例えば私は安室奈美恵さんのファンなので、安室奈美恵さんがホームランを打ったら僕は幸せな気分になり

ます。でもそれはタレントの効果であって、純粋なスポーツの効果ではないんじゃないかと思います。なので馴染みの薄い海外の選手を使い、名前やロゴが見えないようにモザイクをかけた映像を実験に使用しました。

勝敗と共在

——よく分かりました。今後、今回の研究をどのように進展させていかれますか？

佐藤 私よりサーチチームとしてももう次を見ています。次にやりたいのは2つあります。1つは勝敗です。スポーツは勝敗がつきものですので、勝敗を加えた映像などの研究デザインを考えているところです。

——確かに応援するチームが勝った時と負けた時では脳の活動にも変化がありそうですね。

佐藤 ただリサーチチームとして強く興味を持って見るわけではありません。今回の研究結果はSNS

などで世界中にシェアされていて、学術界や海外から多くの反響がありました。例えば「自分の好きなチームや人気チームでなければこの効果はあり得ない」といったメールもありました。英国でも似たような研究があり、応援しているチームが負けた時のファンの脳活動を見ると、むしろ彼らは不幸せになっているというデータが発表されているようです。確かに可能性としてあるだろうとは思いますが。ただ私たちはスポーツを活用して世の中が幸せになるために研究していますから、そういう負の裏付けが出たら、それを解決するための研究を次にやれば良いと考えています。

——2つ目は何ですか？

佐藤 「共在」きようざいに注目しています。スポーツは1人で観戦するよりも人と一緒に見ることの方が多くですよね。人と一緒にスポーツを見るとどんな効果が出るのか興味があります。

——1人で見ると2人で見ると脳が活動が

より活性化して、血流量が増えるということをデータで実証するということですか？

佐藤 血流量もそうですが、私たちが着目しているのは「シンクロ」というものです。脳活動はシンクロ、つまり同調するらしいです。

——他人の脳と同調ですか？ どういうことでしょうか？

佐藤 例えばハッピーな人が近くにいると、こっちもハッピーになるという経験はありませんか？

——あります、あります。

佐藤 それを脳科学のアプローチから、どう脳波がシンクロしていくのかに、今すごく興味を持っています。MRIは常設場所に行かなければいけないので、ポータブルなものを使うしかないのですが、スポーツはテレビ観戦する方が、スタジアムやアリーナで見るより頻度が高いので、実験室の中でテレビ観戦しながら2、3人に装置をつけてやれば可能だとは思っています。

——1人で見ると複数で見た方が感動を分かち合えるので、幸福感も大きくなるような気がします。

佐藤 確かに会話があればより強い効果が出ると思います。でも一つ怖いのがネガティブな人と一緒に観戦したら、自分までつまらなくなる可能性だってありますよね。なので会話などはせず、ただそこにいるだけでどうなるか、という方が興味深いと考えています。

自然の効果

——なるほど。話は変わりますが、佐藤先生ご自身はもともと脳に興味があつたのですか。

佐藤 一時期、自分はなんでこんなに不幸なんだろうと思っていた時期がありました。米国で学位を取ったのですが、学術界は生き残るのが本心に厳しい環境でした。そんな中で、せっかくスポーツの研究をしているのなら、その研究で幸せな人を増やせ

たらしいなという思いが強くなりました。幸せか不幸せかなんて主観じゃないですか。その主観はどこからくるのかと考えると、気持ちをつかさどるのは脳だというのは実感としてありましたね。

——スポーツ観戦ではないですが、落ち込んだ気分を変えるために、何か気分転換に効果的だった体験はありましたか？

佐藤 ありましたね。私の場合は自然だったんです。森の中に入るとか、当時はフロリダに住んでいたので海に行つてサーフィンをやりました。波にのまれたりすると生きている感じがしましたね。

——私も何十年もジョギングをしています、自然の中を走っていると感覚が研ぎ澄まされて、ふだんは分からない草木の匂いが感じられます。コンクリートの中だけで生活していると、気づかないうちに心が乱れてくるような気がします。

佐藤 私もそれは思います。だから今年度はアウトドアスポーツの研究もしています。自然を何かお葉

を注射するみたいなイメージで使えないかと思つていて、今、バーチャルアウトドアというのをチームで進めているところです。草木の匂いまで再現するのは難しいですけど（笑い）。

実社会に活用

——スポーツももつといい活用法があると思つています。その意味でも佐藤先生のチームの研究成果は、健康増進や国民の生活の質の向上などにも活用できると思います。

佐藤 私もそう思っています。ただ脳波や脳活動は「ピツ」という本当に小さな動きです。なので、発見自体はとてつもなく面白いのですが、社会実装（得られた研究結果を実社会で活用、展開すること）という視点では慎重になる必要があると考えています。様々な研究のアプローチを用いて、さらに勉強していきたいとは思っています。

——その「ピツ」が大事じゃないですか。スポーツ



を観戦すれば気分がよくなるというデータの裏付けが取れたのであれば、有効活用できるはずです。

佐藤 そうですね。「ピッ」が100回続いたら人間の行動にも大きな影響はあると思っています。実際、スポーツではないのですが、カナダなどでは博物館や美術館のチケットを、精神的に少し落ち込

んでいる人たちに配って、アートの触れて元気になってもらうという国の取り組みがあります。英国のマンチェスターでは同じような目的でサッカーのチケットが活用されていたと記憶しています。無料のチケッ

トを配ってスタジアムで生のスポーツを観戦して、元気になつてもらおうという取り組みは推奨できると思います。

——日本ではまだその発想はないですね。

佐藤 あまり聞いたことがないですね。スポーツや音楽は誰もが認める公共財ではないので、国のお金を使うことに賛否があるのも納得しています。実際、スポーツの観戦チケットはチームなどの特定の団体にお金が流れるのでクリアしなければならぬ壁があるのは事実ですが、私はそんなに難しいことではないと思っています。

——国はやらなくても、英国のマンチェスターのように、Jリーグのクラブやプロ野球の球団が招待するという発想もありますね。

佐藤 そうなればチームのブランドも上がると思うし、スポーツそのものの価値も上がると思います。スポーツとウェルビーイングはすごく相性がいいので、できることはたくさんあるはずです。

エンジンヨイベースボールと スポーツマンシップ

構成 菅藤正徳
写真 山内亮治

慶應義塾高校野球部の森林貴彦監督(51)は、2023年夏の甲子園大会でチームを107年ぶりの優勝に導いた。その快進撃とともに注目されたのが、高いレベルの野球を笑顔で愉しみながらプレーする伝統の「エンジンヨイベースボール」。いったいどんなチームづくりをしているのか。指導者としての信念、高校野球の価値、その根幹にある「スポーツマンシップ」、めざすべき未来……。監督就任10年目の節目に語ってもらった。

(本稿は2024年12月7日に開催された日本スポーツ学会「第130回スポーツを語り合う会」の講演を再構成したものです)

森林 貴彦(もりばやし・たかひこ) 1973年(昭48)6月7日、東京都生まれ。慶應義塾高校時代は野球部で遊撃手。慶應義塾大学進学後は学生コーチとして慶應義塾高校で指導。卒業後に就職したNTTを3年で退社。筑波大学院に進学してコーチングを学び、教員免許も取得して慶應義塾幼稚舎の教諭になる。12年に慶應義塾高校の助監督、15年8月に同校監督就任。18年春に9年ぶりにセンバツ出場。同年夏に10年ぶりに夏の甲子園出場を果たし、23年夏に同校107年ぶりの全国優勝を飾った。

皆さんが高校野球をイメージした時、何を思い浮かべるでしょうか。丸刈り、監督の周りで直立不動、「ハイッ」と大声を出して返事をする……一般的にはそんな感じでしょうか。

あえて強い表現で言えば、私はそのイメージをすべて覆^{くつがえ}したいと思っています。目指しているのは皆さんの抱えている高校野球……ではないチームです。それをつくるべきだし、つくることに価値があると思っています。もちろん反対意見も大いに結構です。その議論のきっかけになるようなチームづくりだと思っています。

現在、私は51歳です。あのイチローさんと同じ年になります。慶應の中高6年間野球部員で、慶應大学時代に高校の学生コーチを4年間やりました。卒業後にN.T.T.に就職したのですが、野球の世界に戻ることを選択して退社。教員免許も持っていなかったし、スポーツを一から勉強したいと思い、筑波大学大学院に入りました。

そこで大きな転機がありました。同じ研究室にいたアメフトや陸上などいろんな競技出身者に、「なぜ野球はみんな一緒にウオーミングアップをするのか」「二人一人課題が違うのに、なぜ同じ練習をするのか」と聞かれて、私は何も答えられませんでした。当時、古くさい高校野球を変えたいと漠然と思っていたのですが、その割に自分は野球という枠の中でしか考えていなかった。頭を揺さぶられるようでした。これから指導者をやるのなら、高校野球という狭い世界ではなく、スポーツ、社会との関わりの中で、チームをどう位置付けて、どんな人材を育てていくのか、という視点に気づかされました。

2002年に慶應義塾幼稚舎（小学校）の教員になって、今年で22年。慶應高校の監督は2015年からで10シーズン目になります。高校野球の監督は全国に4000人弱。小学校の教員は数万人おりますが、それが重なっている人はおそらく私くらいで、だからこそ見えてくる景色がある。その話も後

ほどします。

プロセスも愉しむ^{たの}

さて最初に本日のテーマの一つ「エンジョイ・ベースボール」についてお話しします。皆さんはこの言葉を聞いて何をイメージされますか？ 優勝した時にテレビのワイドショーでは、髪の毛を風になびかせて笑顔で走って「みたいなところが強調されて報じられました。「楽しい野球でしょ」「勝つても負けてもいいんだ」と思われているかもしれないですね。でも、そんな浅いものじゃないんです。

私たちが目指しているのは「より高いレベルの野球を愉しもう」です。スポーツなのでもちろん楽しみますし、勝ちにこだわります。ただ現状維持の野球を愉しもうではなくて、もっと上手になりたい、さらに強くなつて強い相手に勝ちたい、だから「今よりも高いレベルの」という枕言葉がつきます。そのため地道で厳しい練習が必要で、苦しいことも

試行錯誤しながら乗り越えなければいけない。そのプロセスも全部含めて「野球って楽しいよね」という理解を、選手にしてもらいたいと考えて指導しています。

そこで私の指導者としての信念をキーワードで紹介します。

最初が「成長至上主義」。これは後ほど話をする「勝利至上主義」の対義語としてつくりました。人間的な成長を中心に据えることで、最終的にそれがチームの勝利にもつながるというストーリーです。

成長するためには、上手になりたい、強くなりたいという向上心が必要ですが、残念ながらそれを削いでしまうチームもたくさんあります。やる気満々で入部したのに、いつの間にか監督にしかられないように目立たないようにやる。そんな一日を積み重ねても面白くないですよ。そうならないように向上心を大きくしてあげたいと思っています。

次に「自分で考える」。当たり前だと思われま

が、意外に今の高校生も社会人も自分で考えて、自分で決めた人生かという、けっこう怪しい。親が導いてくれたり、気づいたら決まっていたことの方が多いのではないだろうか。

入部した部員に「こう構えろ」「こう打て」「こう投げろ」などと、全部先に教えてしまったらどうなりますか？ その通りにはします。しないとしかられるから。でも、それでは自分のアイデアなんて出てこないですよ。だから、まず自分で考えて追求するのが大前提なんです。もちろん私もサポートはしますが、最初から全部教えるというのは違うと思います。「監督の言う通りにできました」なんてコメントは一番いらぬ。そうではなくて「自分で考えて工夫したらできました」くらいでちょうどいいんです。

というのも昔に比べて人生の選択肢がいろんな方向に広がっています。結婚する、マイホームを購入する、上場企業に勤めるといって何となくの幸せの基

準は、もう変化しています。今の高校生が大人になつたときはさらに多様化しています。だから隣と同じことをやっていても意味がない。自分の人生をどう生きていくか、自分で考えて追求していく時代になっています。そのために自分がどんな選手になりたいかを考える習慣をつけておかないといけないと思います。

失敗を許す

次が「任せて、信じ、待ち、許す」。私は小学生や高校生にいろんなことを期待して任せて、信じて待ちますが、よく裏切られます（笑い）。でもそれを許すまでが仕事だと思っています。学校はいろんな失敗を経験させてあげる場もあるので、失敗しないようにこつちが先回りして指示してしまうと、自分で何も考えなくなってしまう。失敗と書いて経験と読む。失敗しても、次に向けて対策をして変わってくれば十分なんです。

具体例を挙げると、昨夏の甲子園優勝メンバーにメガネをかけた延末藍太という左バッターがいました。3年の夏の大会直前の5月までは左ピッチャーをまったくといっていいほど打てませんでした。ところがなぜか6月くらいから練習試合で左ピッチャーをパカパカと打ち始めたんです。本人いわく「なんか軌道が分かりました」と。打てなくても可能性はあったのですと起用してきました。それが最後に実を結んだ。これは任せて、信じて、待つ部分ですかね。

もう一つは昨夏の甲子園のトップバッター丸田湊斗の三星盗塁です。彼は判断力、決断力が優れていたのも、ふだんから盗塁は本人に任せていました。3回戦で対戦した広陵高校（広島）に高尾響君という素晴らしい投手がいたのですが、三星への盗塁に關しては少し注意が低かったたので、大事な時には三盗を狙おうとタイミングを練習していました。

1回表、丸田が1アウト二塁に出ました。彼は私

に「盗塁いけます」とサインを出しました。私はまだ早い、大事な場面だと思って苦笑いして無視したのですが、彼は次の瞬間に三盗して1アウト三星にチャンスを広げて、初回到一気に3点が取れました。「自分で考える」「任せる」という部分がいい面に出たと思います。

小学生と高校生

高校生を指導する上で私にとって一番大きいのは、小学校の担任をしながら、監督をしているということです。平日は午後3時半まで小学生を指導して、電車移動して高校生の練習を見る。そうすると非常に強く感じるがあります。それは高校生がとても大人に見えるということです。だから高校生を大人扱いできる。大人なんだから頼むよと。よく高校の監督が「うちの子たちが」という言葉を使いますが、私はまったく「うちの子」なんて思わないですよ。

高校生の大人としての長所である体力、理解力、計画性、意志などと、一生懸命、疲れ知らずといった子どもとしての長所の両方を引き出す指導をしたいなと心底思っているわけです。

次に「フラットな組織を築く」。私は監督と部員は肩書や地位ではなく、役割が違っただけだと認識しています。「監督」や「先生」ではなく「森林さん」と呼ばせています。飛行機に例えると監督は機長ですが、機長だけでは飛べませんよね。いろんな人が役割を全うして飛ぶことができるんです。チームも同じだと思っています。ちなみに小学生には「モリバ」と呼ばれています。

そして「伝統をつくる」です。伝統も誰かが始めたものでしょう。守り、受け継ぐだけではつまらないですよ。

例えば他校との練習試合で3チームを混ぜてA、Bチームをつくってミックスゲームをしています。監督は後ろで見ているだけ。そうするといやでも選

手同士でコミュニケーションをとります。試合が終わったら選手たちは本当に仲良くなる。試合のでない冬場には遠隔地のチームとズームで交流したり、神奈川県内でリーグ戦（14チームが参加）を主導したりもしています。

また特別支援学校の生徒との合同練習も実施しています。障がい者との接し方を身につけるには、一緒にやるのが一番。言い方や接し方など分かることが言い尽くせないほどあります。そういう場をつくるのが私たちの仕事だと思っています。

黒い雲と足かせ

そんな中で私たちが戦っているのが、先ほども話をした「勝利至上主義」です。これは日本の育成年代のスポーツに覆い被さっている大きな黒い雲です。勝利を目指すのは当たり前ですが「勝利至上」がダメなんです。2、3年間で結果を求めてしまうと、勝つためにサイン盗みなど手段を選ばなかった

り、エースの肩や肘の故障などの犠牲を払ってでも勝とうとするなど、いろんなゆがみが出てきます。

高校野球を教わり、学んだ高校生はその後も長い人生を生きていきます。プロ野球選手になれるのは100人に一人。ほとんどの高校生が野球とは関係のない人生を送るわけですから、指導者は野球以外のものも身につけさせ、伝えていく必要があります。少年野球の指導者は「子どもたちが勝ちたいと言っている」とよく言います。でも大人は同じ目線にならず、もつと冷静な視点で先を見た指導の仕方があるはずです。

少し過激な論調になってしましますが、残念ながらまだまだ高校野球は同調圧力、主従関係、上意下達、思考停止、旧態依然、絶対服従、固定観念が固まった形になっています。でもこれは高校野球だけではありませんよね。皆さんがお勤めの企業や社会、コミュニティも、新しく変わらなければならぬときに、これが大きな足かせになっていること

は間違いない。私は高校野球という切り口からこういうものを壊していきたい。今の高校野球のバリューであれば、取り上げてもらいやすいとも思っています。

「勝ち」から「価値」へ

今までは高校野球も他のスポーツも「勝ち」を追求してきました。企業なら「利益」でしょう。でもこれからは「価値」にシフトしていかなければ、見向きもされなくなります。だから私たちは「スポーツには、部活動には、高校野球にはこんな価値があります」と明確に伝える努力をしなければなりません。それを今までの指導者はざぼつてきていましたから。

その価値とは何か。例えばスポーツマンシップ、インテグリティ（高潔性）、自分で考える習慣、多様性など、教室や教科書ではなかなか教えられないことです。だからグラウンドで仲間と切磋琢磨せつさたくます

る中で、勝敗の厳しさも感じながら、身につけてもらいたい。その中でも大きな柱と考えているのが、今日のもう一つのテーマの「スポーツマンシップ」です。「スポーツマンシップ」はスポーツをやっている人だけではなく、世の中の人みんなが身につけたら最高の国になりますし、最高の社会になります。

先ほどの勝利至上主義とも絡みますが、スポーツマンシップと対極にあるチームはまだ国内に存在します。最近では減っていますが、セカンドランナーやベースコーチがサインを盗み見たりするチームも残念ながらあります。

教員がサイン盗みを許すというのはカンニングをばれないようにやれよと言っているのと同じです。それがスポーツになると仕方ないみたいな空気になる。そうじゃないでしょう。勝利だけではなく、勝ち方にもこだわるのがスポーツマンシップです。正々堂々と戦って勝つ。それが最高の勝ち方じゃない

いですか。

尊重、勇気、覚悟

スポーツマンシップとはスポーツに限らず、人間力そのものの根幹の部分です。じゃあ何？ というとあまり答えられないですね。日本スポーツマンシップ協会の方が定義しているのが、いい試合を実現するための大事な心構え、尊重、勇気、覚悟です。ルールや相手、仲間、審判を尊重する。リスクを恐れず勇気を持って決断してプレーする。勝利を目指して全力を尽くし、どんな結果でも受け容れる覚悟。それがスポーツマンシップに置き換えられると私も感じています。

その例で言うと、昨夏の決勝戦で戦った仙台育英高校も素晴らしいチームでした。私の優勝監督インタビューは一塁側の仙台育英のベンチ前で行われました。目の前にずらりと並んだ仙台育英の選手たちは、私の方を向いてインタビューを聞き、終わつ

たら拍手をしてくれました。すごいと思いました。心から本当に素晴らしい相手だと思いました。

慶應高校にも同じようなことがありました。22年秋の大会の東海大相模との準々決勝で、相手のファーストがファウルフライを私たちのベンチ前ギリギリでキャッチしました。その瞬間、ベンチにいた選手たちが「ナイスプレー」と拍手をしました。

昨夏の甲子園では沖縄尚学との準々決勝で、相手の4番打者に先制の2ランホームランを打たれたのですが、大きな素晴らしいホームランで、ウチのベッチの選手たちも拍手していたんです。これには私も驚きました。一緒に試合をしている仲間として、相手味方関係なく、いいプレーは讃える。スポーツマンシップがだいぶ身についたのかなとうれしく思いました。

こういうものを築いていくのが高校野球の大きな価値だと思います。濃淡はありますが、スポーツマンシップを身につけることは、毎年選手が入れ替

わつてもできることです。

最後に、監督は目の前の選手や子どもたちに成長を促すのが仕事です。企業の社長は社員、管理職であれば部下でしょう。でも私は指導者も選手と同じようにもつと成長しなければならないと思っています。監督だから、社長だからオレの話を聞け、というのではなく、監督になったら1年生から成長していかなければならない。

今シーズン10年目の私は10年生としてさらにいろんなことをやっていかなければなりません。教育ではなく、共に育つという意味の「共育」がすごく大事だと思っています。

「甲子園で優勝して何が見えましたか」と、よく聞かれますが、何も見えないですよ。日々、葛藤、試行錯誤、何も変わらないです。去年できていたのに、なぜ今年できないのかということばかりです。その分、私がさらに学んで、新たなものを身につけていかなければならないだろうと思っています。



第1回 日本スポーツ学会大賞

〔受賞者〕
坂田信久氏と
日本テレビ箱根駅伝中継スタッフ

.....

日本スポーツ学会は、長い年月にわたり
スポーツの発展を陰で支え続けた人物、ある
いはグループを表彰する「日本スポーツ学会
大賞」を創設。第1回は、不可能と言われた
箱根駅伝の完全生中継を実現した「坂田信
久氏と日本テレビ箱根駅伝中継スタッフ」に
贈られました。本稿は2010年4月24日、
早稲田大学で行われた、番組の歴代のチーフ
プロデューサー3名による受賞記念講演を再
録したものです。

(構成＝阿部雄輔)

実現までの長き道のり

坂田信久

(第1回中継チーフプロデューサー)

このたび思いがけない表彰をしていただきました。テレビには一人でできる仕事はありません。第1回の箱根駅伝の中継にかかわったスタッフは650人。今年は950人。これまで24回放送していますから、かなりの人数になります。かかわった大勢のスタッフとこの受賞の喜びを分かち合いたいと思います。本当に有難うございました。

私を箱根駅伝に導いてくれたものは何だったのか？ 思いついたことがふたつあります。

私は北陸の富山から体育教師になるつもりで東京に出てきました。学生時代はサッカーに明け暮れた毎日でしたが、大学2年のときに「日本サッカーの父」と言われるデットマール・クラマーさんの講演を聞く機会がありました。そのとき彼が語ったのは、

スポーツを啓蒙する上で教育者が果たす役割の大きさと、西ドイツのゴールデンプランの紹介でした。講演の終わり近くになって、彼はスポーツを啓蒙する上で教育も大切だが、報道機関、メディアも大切だと言って、ある一例を紹介しました。

ミュンヘンの片田舎にサッカーの大好きな少年がいて、地元の少年サッカー大会で大活躍をしました。翌日地元の日刊新聞に「サッカーの天才少年があらわれた」とその活躍が報じられました。ごく小さな記事だったそうですが、その少年は大喜びしてこれまでに以上に練習に打ち込みました。クラマーさんは偶然その少年に出会い、名門クラブのバイエルン・ミュンヘンに入団をすすめたんだそうです。

「彼はまだ無名です。でも近い将来きつとみなさんは彼の名前を知ることになるでしょう。もしこの名前をみなさんが知ることがなかったら、私に選手を見る目がなかったと思うてください」

と言うと、黒板にその選手の名前を書きました。

その少年の名はフランツ・ベッケンバウアーです。その講演が私の志望を教職からメディアに方向転換させました。

入社1年目の強烈な出会い

もうひとつは日本テレビに就職が決まった時のことです。学生時代、私は富山県学生寮にいました。その寮は富山出身の政財界の方々の支援によって運営されていました。私が日本テレビに就職を決め、寮長さんに報告したところ、驚いたことにすぐ正力松太郎さんに会いに連れていってくれました。日本テレビの創業者だった正力さんも実は富山の出身で、寮の理事でもありました。実際にお会いできたのはわずかに数分でしたが、そのとき正力さんがおっしゃったことはよく覚えています。「テレビは文化の担い手だ」ということと、「日本で最初にテレビ事業を起こしたパイオニア精神を忘れないように」。このふたつの言葉が、その後のテレビマン人生を送る

上で支えになっていたように思います。

箱根駅伝との出会いは入社1年目でした。日本テレビでは新人が正月のスポーツ取材をする慣例になっていて、私は箱根駅伝を初めて取材しました。40回の記念大会で、一番の注目株は東京オリンピック1万メートル代表候補に決まっていた順天堂大学の2年生、澤木啓祐選手。現在日本陸上競技連盟の専務理事ですが、彼が華の2区を任されていました。ところがレースが始まるとその澤木選手がまさかの大ブレーキで、区間15位という結果に沈んでしまいます。

レース後、順天堂大学の帖佐寛章監督が報道陣に囲まれて話をしていました。澤木選手は大会の前夜、「膝が痛くて走れない」と言っていました。当日の朝になっても良くなりません。監督は、「お前はチームのエースだ。4年間2区を走る責任を負いながら成長してほしいと思っている。どうだ、歩けるか?」と言って送り出したそうです。さらに監督は、「2区を4年間任せるランナーがいないと優勝できない。

順天堂は澤木を育てて優勝するんだ」とも言っていました。

そのときに私は新人で、技術のことなど何ひとつ分からないのに、「箱根駅伝を中継しましょう」と口走って先輩たちから呆られました。それもそのはずで、この年、1964年に行われた東京オリンピックでNHKが世界で初めてフルマラソンのテレビ中継に成功しました。それも特別に自衛隊のヘリコプターを使い、運輸省が航空管制する中でようやくできたのですから、私の当時の提案がいかに無謀だったかお分かりいただけると思います。

その後も澤木選手は4年間2区を走り続け、4年生のときに区間賞の走りで順天堂大学に初めての優勝をもたらしました。そうした最初の強烈な出会いがあつて以来、箱根駅伝は私の中でずーっと気になり続けていました。

一方でテレビの技術が進歩していきます。1980年代に入ると、民間放送の技術力がついてきたこ

とと、日本人の気質に合うのかマラソン、駅伝の視聴率が良くて、イベントと中継の数が増えていきました。1970年代の初めには福岡国際マラソンと全国高校駅伝の2つだけだったのが、1983年には6つ、1986年には20に増えていきます。私もNHKに技術指導を受けて北海タイムスマラソン、東京国際マラソン、横浜国際女子駅伝の中継をしていきました。

他局の中継実現に大いに焦る

テレビ番組として箱根駅伝がどれだけ魅力的か、多くのテレビマンは分かっていたはずです。10人のランナーがそれぞれ20kmを超す長距離をタスキをつないで走る日本一過酷な駅伝である上に、優勝争いだけでなくシード校を争う面白さがあること。若者が必死に走りタスキをつなぐ悲壮感が人々の琴線に触れること。コースが都会、海、山と変化に富んでいる上に、近くに日本のシンボル富士山が望め、多

くの人々が修学旅行や観光旅行で訪れる誰もがよく知っているコースであること。伝統のある大学が会場していること。家族そろって楽しめること。合間に他のことをしながらでも楽しめるテレビ番組であることなどです。しかし42・195kmは中継できても、200kmを超す距離と冬の箱根の山を克服することは不可能でした。

ところが

1979年にテレビ東京が10区だけの中継をしたんです。20年前から狙ってきた私としてはウカウカしておれません。取材に行った



1985年12月の全国高校駅伝、この大会は兵庫県 の報徳学園が優勝しましたが、大会後の記者会見でメンバー全員が、「次の目標は箱根駅伝」と答えるのを聞いて、決意を固めました。

休日を利用して箱根駅伝のコースを歩き、出場した選手や大会にかかわった人々を取材しました。走った人の10人に9人は思い出話をしていると、一瞬涙ぐみました。取材を重ねていくと、私が初めて経験した大会で澤木選手と帖佐監督のドラマに魅せられたように、大正9年、1920年に始まり、すでに60回以上も行われていたこの大会には同様の感動的な話や面白いエピソードがふんだんにありました。

歴史を彩るエピソードの数々

早稲田大学で第1回から3回まで走った麻生武治さんは、「箱根駅伝の話を聞かせてください」と言うとき、いつも「ちょっと待て」と言つて、滝廉太郎の「箱根八里」をフルコーラス歌ってから、「何が

知りたいの?」と言ってくれました。

明治大学の小林芳行さんは、大会史上一度だけ1区からのタスキが渡らなかつた2区のランナーでした。予選会の前日、お父様が危篤になり、予選会が終わってすぐに駆けつけ、本大会出場を知らせることができました。お父様は小林選手を待っていたかのように亡くなりましたが、「ビリになるなよ」、これが最後の言葉でした。「私がどんな思いでタスキを待っていたか。忘れると言われますが……」と涙を流しました。

第2回大会、日比谷で交通整理をしていた前田喜太平巡査は、目の前を走る学生たちの走りに魅せられて思わず一緒に走り出してしまい、職場放棄で免職。一念発起して日本大学に入り、4年間選手として走りました。これには後日談があつて、放送で紹介したら遺族から連絡があつて、「前田さんは箱根駅伝を走りたくて自ら退職したので、免職になつたのではない」と。

これも日本大学の話ですが、第6回大会、いまだにどうして走つたのか真相が分かっています。3区で人力車夫が走りました。車夫はさすがに速くて、4人を抜きました。レース後に車夫だったことが判明します。追い抜きざまに、「あらよつと」と声を出したのがアダになりました。日大は違反をしたということで翌年は出場を辞退しています。

技術スタッフの応援を得て

次に私がプロデューサーとして考えたことは、スタッフの人選でした。それまでは職場のシフトで決められたスタッフと仕事をしてきましたが、箱根駅伝の企画実現に向けて、初めてパートナーを自分で選んで上司にお願いしました。ひと回り以上年齢が下の田中晃君を指名しました。パートナーは、同じ考えの人とすると楽で仕事もしやすいのですが、仮にうまくいったとしても自分のレベルまで。一方自分にはないものや足りないものを持つている人と良い

関係で仕事をする、自分が持っている能力以上の仕事ができる。良い関係はお互いに仕事で尊敬し合えるものを見せ合わなければ築けません。私は尊敬できる仕事人であることを分かっている田中君を選んだわけですが、私はどうやって彼から評価を得るか、そのために当時の私は懸命に背伸びをしていたように思います。

箱根駅伝の中継は他のスポーツ中継と決定的に違います。他の中継では現場の臨場感をどのように伝えるかに気を遣いましたが、箱根駅伝はその映像自体を伝えることができるかという、きわめて基本的なところから出発しなければなりません。とくに不可能と思われるのは箱根の山で、箱根の山を克服しなければ箱根駅伝の中継したことになりません。本音を言えば技術スタッフたちが乗り気になつてくれるのか非常に不安でした。本来技術畑の人間は、200%大丈夫だという確信がないと引き受けません。放送事故が起きたら自分たちの責任に

なつてしまうからです。案の定技術局長は、「危険だからやれませんか」と言ってきました。あきらめるわけにいきません。私と同期でアメリカで技術研修を経験している大西一孝君という技術スタッフに相談しました。大西君は何と、「不可能に挑戦するのは面白いじゃない」と、一緒に研究することを同意してくれました。

私と田中君と大西君を中心に、どうすれば実現できるのかを話し合い、研究する日々が始まりました。私には腹案がありました。1968年に作家の虫明^{むしあけ}亜呂夢^{あろむ}さんをお願いして、スポーツドキュメンタリーの制作をしたことがあります。題材は富士スピードウェイで行われたストックカーレースで、そのときの虫明さんの手法は、ストックカーレースの歴史や面白さ、そして何人かのレーサーの人生を挿入しながらレースを見せてゆくというやり方でした。箱根駅伝も、技術の手当てができないところをエピソードなどを映像化してカバーすれば可能になる

のではないかと考えたわけですが、いろいろなエピソードを知っていくにつれ、箱根駅伝の放送はレースの中継も大切だが、そのエピソードが中継の価値を高めることに気づいてきたのです。デメリットがメリットになる。今から思うと実はこれが一番のキーポイントでした。

ためらう役員たちを執念で説得

制作・技術連名の箱根駅伝の企画提案は、最初役員会を通りませんでした。理由は、関東の大学だけのローカル大会で視聴率が取れるわけがない。制作費の回収ができない。中継している全国高校サッカー選手権と日程が重なり、制作能力がない。事故が起きたらどうするんだ？ などでした。その間にヘリコプターを電波の中継基地としてプランしているのに、讀賣新聞社の取材小型ジェット機が墜落する事故があつたりもしました。

ひとつひとつつぶしていきました。たとえばロー

カルだという件は、その年に走った選手の出身地を調べたら、47都道府県の中で選手がいけないのは2県だけでした。字幕で選手を紹介するときに出身地を出しますとか、社長室に行つて先ほど話したエピソードを披露したりして、3カ月後にやつと役員会側が折れて、箱根駅伝の中継が決定。翌日の新聞で、「こんなことが本当にできるのか？」と、大きな記事になりました。

大会の主催者である関東学生陸上競技連盟は、日本テレビが箱根の山の中継することにびつくりし、喜んでくれました。ところが釜本文男会長から、「坂田君、1、2年でコースを変更するか中止の決心をしなければならなくなるが、それでも日本テレビはやつてくれるの？」と言われて、今度はこつちがびつくりしました。

箱根駅伝は、中止かコースの変更を警察庁から迫られていたのです。警察庁は全国に増え続けるロードレースの警備に困っていました。交通整理から沿

道を埋める観客の整備まで、ロードレースに動員される警察官の数は少なくありません。民間のイベントに警察官を投入することにも批判が高まっています。私が今ひそかに、中継してよかったと思っているのは、箱根駅伝を継続することができたことです。テレビ中継によって多くの人が関心を持ったイベントを、警察庁は排除できなくなりました。

1987年1月2日、私たちは第63回東京・箱根間往復大学駅伝競走、いわゆる箱根駅伝を中継しました。本番前で私の仕事はほとんど終わりました。あとはパートナーの田中君の仕事がうまくいくように、彼の後ろで祈って見ていただけでした。

テレビが忘れてはいけないこと

箱根駅伝の創設には「日本マラソン界の父」金栗四三さんが深くかかわっています。日本が初めて参加したオリンピック、1912年のストックホルム大会のマラソン代表で途中棄権に終わり、世界との

差を痛感した金栗さんは、強いマラソンランナーをたくさん輩出するためにこの競技を考えられました。最初から今の箱根のコースに決まっていたわけではなくて、昔の人の発想は雄大だと思うんですが、たとえばアメリカ大陸横断とか、満州でやるとか、いろいろな案がありました。中でもアメリカ大陸横断は有力で、実際に早稲田大学のランナーとマネージャーが2人でアメリカに行つて、コースを下見しています。現地で何があつたか分からないんですが、そのうちの一人が殺人事件に巻き込まれてアメリカの話は立ち消えます。箱根駅伝は今年86回大会でしたが、僕は100回記念大会はアメリカ大陸横断を実現してほしい。そうしたら僕は何が何でもあと十年生きようと思っています。

最後に私が後輩に言い残したことです。

「テレビは箱根駅伝を変えてはいけない。時代が変わっていけばいくほど、変わらない箱根駅伝が評価される。箱根駅伝はその歴史を同時に放送できなけ

れば意味がない。走った選手、関係者、沿道の応援、箱根駅伝にかかわった人すべての思いを伝えなければ、箱根駅伝を中継したとは言えない。もうひとつ、テレビは箱根駅伝を中継してあげているのではなく、中継させてもらっているという気持ちで仕事するよ
うに」

では、パートナーだった田中晃君にタスキを渡します。

3つのエピソード

田中 晃
(第1回中継ディレクター)

箱根駅伝という宝物に出会えた感謝の気持ちを込めて、エピソードを3つ紹介します。

エピソード1「六郷橋マンション」。東京から多摩川を渡る六郷橋は1区の重要なポイントで、川を雄大にパンして選手にズームインしていくという、

素晴らしい絵が撮れるポイントでもあります。実はこのカメラポジションは、1回目の放送のときと今と違います。

2回目の放送後、最初に

カメラを設置したマンションにお住まいの方から、年末年始に大勢の人が出入りするので、「やめてほしい」と言われました。スタッフと2人で2時間正座してお願いしたのですが結局ダメでした。道路を隔てた正面にひと回り大きなマンションがあつて、とりあえずという気持ちでその理事長さんを訪ねたら、「うちに来てくれないかと思って待ってた」



と言われました。断られた30分後に屋上を貸してもらえらることになり、今お見せしているのは、そこからの映像です。

大手町から芦ノ湖まで、カメラポイントや電波の中継基地のポイントを探しながら、何度も歩きまわした。1987年当時の沿道の高いビルのほとんどに上がっています。当然アポなしでお邪魔するんですが、非常に多くの方が、「箱根駅伝の大ファンです」と言つて、快く屋上に上がらせてくれました。

もちろん箱根町は町を挙げて大歓迎してくれました。観光協会の会長さんが、一緒になつて各家を回ってくれましたし、1回目ときは600人のスタッフの約半分を5区、6区を中継するために箱根の山に投入したんですけど、その300人を泊める場所がなくて困っていたところ、町役場の方のお骨折りで、小涌園のコンベンションホールを借りることができました。もちろん関東学連、1回目から協賛していただいているサッポロビールさん。そういった

いろんな方との出会い、皆さんの協力がなかったら、僕らの中継はできなかった。それを象徴するエピソードが「六郷橋マンション」です。

スタッフ、関係者の献身で中継が実現

エピソード2「人間羅針盤」。中継車のカメラで撮った映像はどうやって放送されるのか。車の屋根の上に機関銃みたいな電波の発射装置を持った、「マイクロマン」っていうのがおりまして、彼が中継電波を上空を飛ぶヘリコプターに送り、ヘリコプターが中継基地となつて放送センターに電波を送るという仕組みです。天気が悪いとヘリコは飛ばない。そのときはどうするか。箱根の山の高いところに何か所か中継基地を設置してあり、中継車からそこに電波を送ります。電波は直進する性質をもっていますから、正確に中継基地の方向に送らないと、映像が途絶えてしまいます。

1号中継車のマイクロマン、福王寺貴之君は、「お

前は人間羅針盤になれ」と言われて、5月頃から何度も箱根の山で走行テストを繰り返しました。ヘリコプターが飛ばないときは天気が悪いわけですから、山頂の中継基地も見えません。しかも箱根の山道はカーブの連続ですから、何度も何度も走って、ここからだと中継基地はどっちの方向、という感覚を、身体に覚えさせたのです。

実は1回目の復路の放送のときは天気が悪くてヘリコプターが飛ばませんでした。福王寺君はみごと人間羅針盤となって電波を送り続けたんです。

これまで24回の放送で、延べ2万人以上のスタッフがかかわっています。箱根駅伝の中継は、肉体的にも精神的にも過酷です。とくに最初はいろいろな試行錯誤もあって、反乱が起きても不思議でないほど悲惨でした。その中でスタッフは誰一人文句言わずに、むしろ非常に誇り高く仕事をしてくれました。大勢のスタッフの献身に支えられて放送できた、というのがエピソード2「人間羅針盤」です。

エピソード3「放送文化基金賞」。1回目の中継は映像と音声をつなげるだけで精一杯でした。ところが箱根駅伝は、どの大学が勝ったとか、タイムがどうか、レースを分かりやすく伝えるだけでは足りない。走った人、走れなかった人、あるいは過去に走った人たち一人一人の思いを表現できなければ中継する資格がない、ということを作作マニユアルに書きました。一人一人のレース、一人一人のドラマ。だから日本テレビの箱根駅伝の中継は、中継所のタスキリレーを全員見せる。アナウンサーが選手名を言うときには可能な限り、大学名だけで終わらせないで、個人名を言う。「筑波大学が今、前に出ました」ではダメ。「山口が前に出ました」でなくてはダメなんです。

そういったスポーツ中継とドキュメンタリーを合わせたようなスタイルが、4回目ぐらいで何とかカタチになったときに、編成局から、「放送文化基金賞に応募したらどうか？」と言われました。日本の

テレビ・ラジオ界では最高の賞で、大賞を獲るとNHKで放送してくれる。われわれも大いに盛り上がったんですけど、応募するカテゴリーがないことが判明するんです。

テレビ開局以来、スポーツ中継がテレビの成長に果たしてきた役割は言うまでもありません。にもかかわらず今現在も放送文化基金賞にも民放連盟賞にも、賞の対象にスポーツ中継のカテゴリーがありません。そんな中、スポーツ中継の制作者をスポーツ学会に表彰していただき、心から感謝申し上げます。その御礼を申し上げて、後輩にタスキを渡します。

放送の過去・現在・未来

新井 直彦

(チーフプロデューサー)

入社してから現在までずっと箱根駅伝にかかわってきました。1年目の仕事は田中晃ディレクターの

下で、650人のお弁当を数えることでした。先輩2人から第1回目の中継の話が出ましたが、あれから今までにどんなところが変わったのか、あるいは何が変わらないのかを、少しお話しします。

大きく変わったところは2つです。ひとつは第1回目当時はアナログ放送だったのが、今はデジタル放送です。デジタル放送になって良いことが2つありました。ひとつは映像がきれいになったこと。もうひとつは、先ほど話に出た「人間羅針盤」が必要なくなりました。今、物干し竿のようなアンテナを1個つけてデジタル波を飛ばすと、360度全方向に電波が飛びますので、あの人間は現在いません。

一方、デジタル放送には欠点のひとつだけあります。ケーブルでつながっている定点カメラの映像はオンタイムで映るんですが、電波を飛ばす移動中継車の映像が、約1秒遅れてしまうんです。カメラの切り換えについてはかつて以上に時間をかけて準備をし、実際の放送でも注意を払わねばなりません。

もうひとつ変わったのは、出場校が15校から20チームに増えたことです。70回の記念大会（1994年）で初めて20校。翌年から15校に戻りましたが79回大会（2003年）から19校＋関東学連選抜の20チームがレギュラー化しました。

一人一人を伝える姿勢は変わらない

第1回目の放送では中継車を3台使いました。79回大会から、20チームをしつかり撮るために、オートバイを1台投入しました。二輪車は山では転倒しやすいので、「トライク」という三輪のオートバイを特別につくり、それにカメラをつけました。

その79回大会は、往路で5回先頭が代わるすごいレースでした。これまでの箱根駅伝の最高視聴率、30%を超えたのがこの大会なんです。実はこのときは、「視聴率が上がる」と言われる「ブレイキ」（選手のアクシデント）はゼロです。先頭争いが白熱し、素晴らしいレース内容だったことと、トライクを使

って後続のランナーをたくさん撮れたことが視聴率30%に結びつきました。

今年からトライクを増やして、車2台とトライク2台の4台体制

にしています。抜き合いをたくさん撮ったり、各校を必ず撮るには、機動性に勝るトライクを増やした方が良いという判断です。

変わらないところはたとえば、中継所での映像の切り換えです。駅伝というのはリレー競技ですが、他のたとえばオリンピックの1600mリレーだと、バトンが渡ると、必ずバトンをもらった方の選手の



映像を追っていくのに対し、箱根駅伝はむしろ、タスキを渡し終えた選手、走り終えた選手の映像を映し続けます。タスキの行方よりも、そこまでタスキを運んできた選手の「ゴール」の映像を見せようというのが、箱根駅伝の中継所の絵づくりで、勝敗と同じように一人一人の選手のドラマをしつかり伝える番組づくりの基本方針は、今も変わっていません。

未来のテレビで見せたいものは……

それでは未来の箱根駅伝中継はどうなるのか？

考えられる夢のようなものは2つあって、ひとつは視聴者が応援している大学の映像をずーつと見られるようになること。それぞれのチームの監督が乗る「運営管理車」という車がありますが、あれにカメラを載せて、媒体は放送かインターネットか分かりませんが、近い将来、その映像をずーつと見ることができるようになるかもしれない。

その次に来るのは「3D」ですね。これまでの24

回の放送で、まだできていないことのひとつが、箱根の山の傾斜を伝えることです。カメラ位置を工夫したり、アナウンサーが、「観客がみかんを落としたらコロコロ転がっていききました」というような実況をして何とか傾斜を伝えようとするんですが、今のカメラではなかなか伝わらない。3Dなら伝えられるんじゃないかと期待しています。

あるいは先頭と2位の選手が、上空のヘリコプターからの映像を見ると大きく差が開いているのに、1号車のカメラでは大して開いていないように見える。今の望遠レンズだと距離感がよく表現できないんですが、これも3Dで見えるようになるかもしれない。

ここにいる3人がいなくなっても、箱根駅伝は続いていくはず。先ほど坂田さんが言われた「テレビが箱根駅伝を変えてはいけない」というポリシーをきちんと後輩に継承するのが、今現在番組をあずかる自分の役目だと思っています。

坂田 信久（さかたのぶひさ）1941（昭和16）年2月20日、富山県富山市生まれ。'63年、東京教育大学体育学部を卒業し、日本テレビに入社。主にスポーツ局で全国高校サッカー（'71年）、トヨタカップ（'81年）、'91年世界陸上東京大会などの中継番組を制作。'98、'2002年、東京ヴェルディ1969の社長を務める。'03、'11国土館大学体育学部大学院教授（スポーツマネジメント）。現在社会福祉法人・東京愛育苑理事とやまふるさと大使。

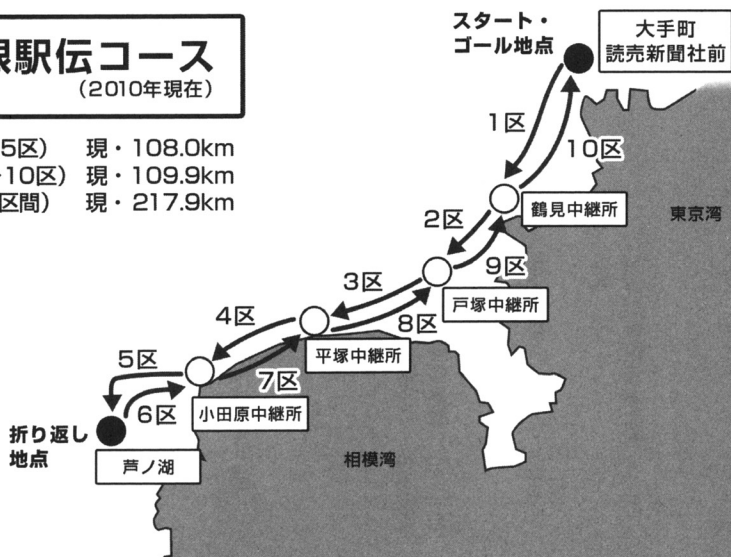
田中 晃（たなかあき）1954（昭和29）年9月12日、長野県松本市生まれ。'79年、早稲田大学第一文学部を卒業し、日本テレビに入社。箱根駅伝中継総合ディレクター（'87、'90年）、チーフプロデューサー（'91年、'92年）を務め、世界陸上東京大会中継（'91年）、劇空間プロ野球（'93年）などの指揮を執る。スカパーJ・SATを経て、現在（株）WOWOW代表取締役会長執行役員、（一社）日本車いすバスケットボール連盟会長。

新井 直彦（あらいなおひこ）1964（昭和39）年7月27日、富山県富山市生まれ。'87年、筑波大学体育専門学群を卒業し、日本テレビに入社。主にスポーツ局で野球、ゴルフ、ボクシングなどの中継番組やスポーツニュースの総合ディレクターを務める。入社以来一貫して箱根駅伝に携わり、総合ディレクター、チーフプロデューサーを担当。現在は箱根駅伝のCMをセールスする執行役員営業部長。

箱根駅伝コース

（2010年現在）

往路（1～5区） 現・108.0km
復路（6～10区） 現・109.9km
総合（10区間） 現・217.9km



『走』第12回



運動会では「走るクラシック音楽」の復活を!

玉木正之

『クシコス・ポスト』という音楽を、知ってますか? タイトルは知らなくても、音楽を聴けば「知ってる!」と答える人は、40歳以上の人は百パーセント。すべての人が「知ってる!」と答えるだろう。かつては運動会で、徒競走などのBGMとして必ず流された楽曲で、ドイツの作曲家ヘルマン・ネッケ(1850~1912)作曲の『郵便馬車』^{クシコス・ポスト}と名付けられた「馬車の走る様子」を描いた小品だ。

他にも運動会で必ず流れた音楽としては、ロシアの作曲家カバレフスキー(1904~87)作曲の『道化師のギャロップ』、フランスで大人気を博したオペレッタ作曲家オッフェンバツ

ク(1819~80)の『地獄のギャロップ(天国と地獄)』、ウィーンのワルツ王ヨハン・シュトラウスⅡ世(1825~99)の『トリッチ・トラッチ・ポルカ』...など。「ギャロップ」とは「馬が走る様子」を表し、「ポルカ」は「軽快な舞踊曲」で、これらの楽曲は、40歳以上の人なら誰もが「知ってる!」と答える音楽だ。

しかし最近の運動会のBGMは、大きく様変わりしたようだ。小生は毎年必ず近所の小学校や地域の運動会に足を運んでいるが、神奈川県^{神奈川}の運動会では、それらの「クラシック音楽」が全く聴かれなくなり、Jポップが流されるようになった。が、どうもポップ・ミュージックでは、みんなが勢いよく「走る」パワーが感じられないように思える。

これも時代の流れなのかもしれない。とはいえ、体育(運動会)を通して音楽教育にもつながった「クラシックの走る音楽」を復活させてほしい、と思うのは私だけだろうか?



夢劇場『馬』

No.37



眼 光

長田渚左

2024年のジャパンカップは、映像でしか見たことのない精鋭馬がフランス、アイルランド、ドイツからやってきた。海外馬対日本馬という構図ならば、もう海外の3頭で決まり?! と思われた。海外組の日々の調教は、連日詳細に報じられ、どの馬も東京競馬場適正問題なしだった。ところがである。

11月24日、快晴の良馬場でのレースは、1着のドウデュース、2、3着は同着でシンエンペラー、ドウレッツアと日本馬が上位を独占した。

海外馬の連敗を止める穴馬とみられたゴリアツト（フランス）は6着。父ディーブインパクトの爆発的な決め手を受け継ぐと言われたオーギュストロダン（アイルランド）は8着。ハッピー調教が積めていると伝えられたファンタステイックムーン（ドイツ）は11着と、海外組は惨敗した。

見せ場がないどころか、参加することに意義があるというような国際親善レースに終わった。

敗因はスローなレース展開と、軽い芝が合わなかった?! というのが大方の見解だ。一方で鋭い末脚を披露したドウデュースはインターナショナルな強さを見せつけた。

レース後「馬の状態に非常に満足している」と繰り返したオーギュストロダンのエイダン・オブライエン調教師は、勝利したドウデュースの関係者を讃え続け、カメラのシャッターを切り続けた。惨敗した海外馬の関係者が仏頂面や苦虫をかみつぶしたような表情ばかりの中で、彼の笑顔は際立っていた。

さすがに世界ナンバー1と言われる調教師だと思いつながら双眼鏡で彼の顔をのぞいた。すると口元とまったく異なる眼の光に、ぞつとした。「次は見てろ」と言わんばかりのギラギラした眼光。ここ何年も日本では見たことのない眼の色だった。



バックナンバーのご案内

バックナンバーを、直接お申し込みいただけます。ご希望の号と冊数を明記し、送料分の切手を左記にお送りください。申し込み住所が変更になりました。

〒168-0063
杉並区和泉1-40-13-401
スポーツネットワークジャパン
『スポーツゴジラ』係

送料値上がりのため、やむをえず変更いたします。

6冊まで 送料 500円
12冊まで 送料 1000円

※特集の内容は本誌巻末カラーページとホームページに記載しています。

【ホームページ】

<http://sportsnetworkjapan.com/>

★お申し込みいただくとき『スポーツゴジラ』への感想もお書き添えいただけると幸いです。

次の春号第66号は2025年3月

中旬刊行を予定しています。

また、バックナンバーは品切表示の号も左記の図書館で読みになります。ご利用ください。

- 世田谷区八幡山・大宅壮一文庫
- 世田谷区深沢・日体大世田谷キャンパス図書館
- 港区広尾・東京都立中央図書館
- 千代田区永田町・国立国会図書館
- 港区芝・東京都人権プラザ図書館
- 新宿区霞ヶ丘・日本スポーツ協会資料室

【理事】

阿部雄輔／五十嵐二葉（弁護士）／池井優（慶應義塾大学名誉教授）／岡田匡令（淑徳大学名誉教授）／長田渚左（ノンフィクション作家）／笠原一也（日本オリンピック・アカデミー名誉会長）／菊幸一（国士舘大学教授）／佐久間昇二（びあ株式会社取締役）／重村一（㈱ニッポン放送取締役相談役）／森林貴彦（慶應義塾幼稚舎教諭）／山口香（筑波大学教授）／山口良治（京都工学院高校ラグビー部総監督）

【事務局】

〒359-1192
埼玉県所沢市三ヶ島2-579-15
早稲田大学スポーツ科学部太田章研究室気付

皆様、ご存じですか？

スポーツゴジラは年4回春・夏・秋・冬の季刊で発行。
都営地下鉄・大江戸線・浅草線・三田線・新宿線の各駅、全国の大学102カ所に設置されています。

スポーツゴジラ®

2025年1月8日発行
第1巻第65号

無断転載・転売を禁じます

企画編集 スポーツネットワークジャパン

長田渚左・阿部雄輔・首藤正徳
波多野圭吾・西本祥子・江川卓美

山内亮治・鈴木希人

制作 株式会社 プライム・オリジンズ

印刷・製本 株式会社 美松堂

発行 スポーツネットワークジャパン

お問い合わせは左記まで

特定非営利活動法人

スポーツネットワークジャパン

〒168-0063

杉並区和泉1-40-13-401